

わたしは良い羊飼い

ヨハネによる福音 10:11-18

(そのとき、イエスは言われた。)「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。——彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」

説教

ヨハネ福音書 10 章 1-18 節の良い羊飼いの喩えは、羊飼いと盗人の喩えに始まり、羊の門の喩え、そして良い羊飼いの喩えで結びとなります。わたしは良い羊飼いだとイエスは宣言し、きょうの福音は羊飼いの喩えを語ります。

わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。 (ヨハネ 10:11)

良い羊飼いはヒツジのために命を惜しまない、それだけではなく命を捨てるといえます。その逆に、雇われ羊飼い (賃金雇用のサラリーマン羊飼い?) はオオカミが来ると羊を置き去りにして、つまり見殺しにして自分の命惜しさに逃げるのだといえます。

さて、オオカミがやってきてヒツジが襲われる。羊飼い B は逃げるけれど、

羊飼いは逃げない、ヒツジからするとB組のヒツジはオオカミ食べられちゃう、でもA組のヒツジは助かる、きょうの喩えはA組のヒツジでよかったね、というお話でしょうか。そう単純ではなさそうです。羊飼いは(ヒツジのために)命を捨てるとありますから、オオカミからすれば抵抗する羊飼いを排除するひと手間が増えるだけで、A組ヒツジだろうがB組だろうがオオカミの餌食になることに変わりがないようです。でも違いがある、イエスはこう言っています。

わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してください。 (ヨハネ10:17)

羊飼いはヒツジのために命を張って命を落とす、そして、ヒツジもオオカミの餌食になってしまうけれど、ヒツジたちは命を再び受けることができる。もう少し福音を正確に読むと、再び受けるために命を捨てることができる、この違いがあります。ヒツジに喩えるなら羊飼いはA組のヒツジになろう、この良い羊飼いの喩えをヒツジ側から解釈すればこう結論できそうです。

ところで、どうやったらA組のヒツジになることができるのか、その選考基準はあるのか。あるのならそれはなにか。

わたしは羊を知っていて、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。 (ヨハネ10:14-15)

イエスさまはこうおっしゃいます。知っているから知っている、お互い知っている、羊飼いがヒツジを知っているし、ヒツジもまた羊飼いを知っている、単純で、カンタンなように思えるけれど、これがA組のヒツジになる条件のようです。

「わたしは羊を知っていて、羊もわたしを知っている」このように信じていることができるなら、わたしたちも羊飼いはA組のヒツジの一匹です。主の平和がありますように。
